今こそ、備えを強化する時②

市内の各学校では、東日本大震災を受けて、津波避難訓練を実施。グラウンドに集まることを止め、「てんでんこ」に避難しました。

■問い合わせ
防災対策課
☎57-8501

▲香南消防職員からの避難経路は1つだけではいけないなどの話を真剣に聞く子どもたち（城山高校体育館）

教訓を生かした避難訓練

今、教育現場では避難訓練の方法が見直されています。

東日本大震災で、多くの犠牲を出した宮城県石巻市の大川小学校。未来あるたくさんの命が奪われました。北上川河口から約4キロにある避難場所に指定されていた大川小は、津波が川を遡上し学校周辺が濁流に呑み込まれました。

この惨事は、沿岸部といくつもの河川を有する香南市にとって、決して想定外とは言えません。子どもたちのために安全でなければならない学校では、避難方法や避難場所を見直し、一人の犠牲も出さない対策と対応が求められています。

赤岡保育所、小・中学校、城山高校が合同で津波避難訓練！

4月27日(水)、赤岡町の保育所(5歳児のみ)、小・中学校、城山高校が合同で津波避難訓練を行いました。

児童、生徒、教師ら計440人が参加した合同の訓練は、初めての取り組みです。

今回は、今まで約100m先の「歴史の丘公園」(海抜12・4m)に避難していた小学校と保育所が、より大きな津波を想定し、約1km先の城山高校(海抜14・5m)へ避難を計画。

小学生は、地震発生の放送が流れると、一斉にヘルメットをかぶり机の下へ。その後、クラスごとに最短の避難路を走り、城山高校まで避難しました。また、保育園児は、防災ずきんをかぶって避難。高校に隣接する中学校の生徒は、高校の校舎2階へ、高校生は校舎の3階へ避難しました。

避難にかかった時間は、地震発生から小学生が11分14秒。保育園児が13分20秒でした。

避難訓練終了後、城山高校の体育館に集まった児童・生徒らは、「家庭でも地震対策を話し合って」「避難路の安全確認をして」など消防署員や校長先生からの話を聞き、避難時の注意点を確認しました。

◀高台にある城山高校をめざして避難する子どもたち

津波てんでんこ

「津波が来たら、取るものも取らずてんでばらばらに逃げる」とする三陸地方の言い伝えの1つです。

「津波てんでんこ」は、1896年に発生した「明治三陸地震」による津波被害の教訓として、岩手県釜石市などの「津波防災教育カリキュラム」に盛り込まれています。

この「津波防災教育カリキュラム」には、津波から避難するための注意点として「地震が発生したらすぐに避難する」「海から遠くでなく、高いところに逃げる」「一度逃げたら、数時間はそこで待機する」などを挙げています。

東日本大震災では、釜石市の小学生1,927人、中学生999人(H23.3.1時点)のうち、津波襲来時において学校の管理下にあった児童・生徒については、適切な対応と行動をとることによって、一人の犠牲者も出すことなく、大津波から生き残ることができました。

また、市内の幼稚園、保育所においても、犠牲者はゼロでした。

釜石市はこれまでの継続的な津波防災教育により、地域の将来の担い手であり、地域の財産である“子どもたちの命”を守ることに成功しました。

避難場所と避難路を再設定し、避難するための課題を洗い出す

県が作成している津波浸水予想図(上図)によると保育所・小学校がこれまで避難場所としていた「歴史の丘公園」周辺は、地震発生から約20分で津波による浸水で陸の孤島となる地域です。

「津波が達しない避難場所はどこなのか」「どのようにして避難をするのか」「年齢の小さいこどもたちの避難はどのように行うのか」など、避難行動や経路を確認した今回の実践的訓練からさまざまな課題が見えてきました。

▶小学校近くにある橋を渡って城山高校へ避難する小学生

避難に時間がかかる保育園児はどうすればいいのか

これまでの訓練でも地域の人たちの協力がなければ短時間での避難が難しかった赤岡保育所の園児たち。今回の訓練に参加しなかった0歳から4歳までの乳幼児を含め、子どもたちの命を守るための方法を考える必要があります。

そこで保育所では、不安を抱える保護者らの要望で、高知大学の大年邦雄教授(防災水工学)を講師に招き、5月18日(水)に南海地震の学習会を行いました。保護者や保育士など約80人が参加し、東日本大震災の状況報告や南海地震による赤岡町の被害予想などを学習しました。その後、「どこへ避難するのか」「避難したときの情報伝達の方法は」などの意見交換を行い、防災について確認し合いました。

全員で助かるための「しくみ」を！

東日本大震災では、多くの子どもたちや教職員の命が奪い去られた学校もあれば、大半が助かった学校もありました。津波の襲来が想定されていなかった学校と、津波からの避難を常に想定していた学校。そこには津波防災への対応の違いがありました。

香南市内の各学校等で行われた津波避難訓練では、想定外とならないように課題を洗い出し早急に、より細かい防災計画を立てなくてはいけません。

そして、継続した避難訓練や防災教育において、この度の震災を教訓とした生き残るための「しくみ」をつくることが必要です。